

Wed. Aug 31, 2022

第6会場

Oral (Theme) | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

Chair: Kyosuke Uchida (Tokai University)

11:00 AM - 12:03 PM 第6会場 (2号館1階11教室)

[生涯スポーツ-A-01] 中学校運動部活動の地域移行における
学校及び地域関係者の認識と課題
(政,社)

*Kotaro Asahara¹ (1. NSSU)

11:00 AM - 11:15 AM

[生涯スポーツ-A-02] 運動部活動における学校と地域ス
ポーツ団体との連携に関する研究：組
織間関係論の視点から (経)

*Makiko Sakai¹, Seiichi Sakuno² (1.

Waseda Institute for Sport Sciences, 2.

Faculty of Sport Sciences, Waseda

University)

11:16 AM - 11:31 AM

[生涯スポーツ-A-03] 運動部活動のステークホルダー間の関
係構造に関する検討 (教)

*Hiroshi Takagi¹, Koji Ishii¹, Naoki Suzuki¹

(1. Tokyo Gakugei University)

11:32 AM - 11:47 AM

[生涯スポーツ-A-04] 部活動における教師の成長過程とその
影響要因に関する研究 (教,経)

*Makoto Ito¹, Ebbe Daigo¹, Norihiro

Shimizu¹ (1. Tsukuba University Sport

Management Lab)

11:48 AM - 12:03 PM

第7会場

Oral (Theme) | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

Chair: Kiyokatsu Watahiki

11:00 AM - 11:47 AM 第7会場 (2号館1階12教室)

[生涯スポーツ-A-05] 共生社会ホストタウンと公共スポーツ
施設経営 (経)

*Kosei Uehara¹, Chihiro Kanayama² (1.

Ritsumeikan Univ., 2. Ritsumeikan Univ.)

11:00 AM - 11:15 AM

[生涯スポーツ-A-06] 障害者の地域参加と共生的スポーツコ
ミュニティへの参加との関係 (ア)

*Nozomi IIDA¹, Mayumi Saito² (1.

Tsukuba Univ., 2. Tsukuba Univ.)

11:16 AM - 11:31 AM

[生涯スポーツ-A-07] 障害者および障害者スポーツに対する
意識の変化に関する研究 (ア)

*Motoaki Fujita¹ (1. Nihon Fukushi

University)

11:32 AM - 11:47 AM

第8会場

Oral (Theme) | 健康福祉研究部会 | 【課題A】 健康増進につながる体力・運動
の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題A】口頭発表①

Chair: Tetsuhiro Kidokoro (Nippon Sport Science University)

11:00 AM - 11:47 AM 第8会場 (2号館2階21教室)

[健康福祉-A-01] 新型コロナウイルス感染症流行下における
産後女性の身体活動量は健康関連 QOLに影
響するか? (ア)

*Yumi Nomura¹, Tomoko Araki² (1. Chiba

Institute of Technology , 2. Osaka Yukioka

College of Health and Science)

11:00 AM - 11:15 AM

[健康福祉-A-02] 発散型の運動プログラムがストレスや脳疲
労に及ぼす効果 (介)

*Moritoshi Matsuzaki¹, Miki Tachiyama² (1.

Shimonoseki City University, 2. MikiFunnit

Co.Ltd.)

11:16 AM - 11:31 AM

[健康福祉-A-03] スキップ動作のイメージに伴う気分と身体
感覚に関する一考察 (介,発,心)

*Junko Kikuchi¹, Mayumi Kuno Mizumura² (1.

Ochanomizu Univ.graduate school , 2.

Ochanomizu Univ.)

11:32 AM - 11:47 AM

第9会場

Oral (Theme) | 健康福祉研究部会 | 【課題A】 健康増進につながる体力・運動
の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題A】口頭発表②

Chair: Masashi Asakura

11:00 AM - 11:47 AM 第9会場 (2号館2階22教室)

[健康福祉-A-04] 大学入学時の体力レベル別にみた精神的健
康度の変化 (体力学)

*Yuichi Nakahara-Gondoh¹, Kenji Tsunoda²,

Toshihiko Fujimoto³ (1. Fukuoka Pref. Univ.,

2. Yamaguchi Pref. Univ., 3. Tohoku Univ.)

11:00 AM - 11:15 AM

[健康福祉-A-05] A Study on "Jubilo-Meshi," a Health and
Wellness Project of Industry-Government-
Academia-Private Sector Collaboration

*Kazuko Takahashi¹, Ryoichi Ema¹ (1.

SHIZUOKA SANGYOU UNIVERSITY)

11:16 AM - 11:31 AM

[健康福祉-A-06] Handbuch Gesundheitssport (2006) に示
されたドイツのスポーツ健康科学研究によ
る運動と健康増進・体力向上との関係につ
いての研究的アプローチ (政,介,社)

*Shigeru Tada¹ (1. no institution)

11:32 AM - 11:47 AM

第10会場

Oral (Theme) | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】グローバル課題の解決に向
けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

Chair: Fumie Yamazaki (Niigata University of Health and Welfare)

11:00 AM - 11:47 AM 第10会場 (2号館4階45教室)

[スポーツ文化-A-01] 大学生アスリートはどのように日焼け
予防を行っているのか? (心,社)

*Aeri Machida¹, Kyosuke Enomoto¹, Yuichi
Matsubara², Hirokazu Arai³ (1. HOSEI
Univ., 2. OSAKA OHTANI Univ., 3. HOSEI
Univ.)

11:00 AM - 11:15 AM

[スポーツ文化-A-02] 第11回オリンピック冬季競技大会
(1972/札幌) 閉会後における恵庭岳
滑降競技場跡地の復原に関する一考察
(史)

*Soya Ishizuka¹ (1. Japan Sport
Association)

11:16 AM - 11:31 AM

[スポーツ文化-A-03] コロナ禍における「ホストタウン事
業」を通じた学生の国際理解に関する
研究 (人)

*Ryu Sakamoto¹ (1. University of
Tsukuba)

11:32 AM - 11:47 AM

第5会場

Oral (Theme) | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】 大学体育の授業をいかに良
質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表②

Chair: Koji Takahashi (Nagasaki University)

11:00 AM - 12:19 PM 第5会場 (2号館4階4E教室)

[学校保健体育-A-06] 生涯スポーツ推進のための経済学的視
点を取り入れた教育の可能性について
(教,経,心)

*Nobuko Sano¹, Hiraku Shiho² (1.

RIKKYO UNIVERSITY, 2. Tokyo Woman's
Christian University)

11:00 AM - 11:15 AM

[学校保健体育-A-07] 大学体育におけるこころの準備運動と
しての「笑いワーク」の教育効果
(教,方)

*Eri Fujita^{1,2}, Shiho Hiraku¹, Yukio

Tanaka^{1,2} (1. Tokyo Woman's Christian
University, 2. Tokyo University of
Agriculture and Technology)

11:16 AM - 11:31 AM

[学校保健体育-A-08] The whereabouts of principles of
physical education in Japan

*Shohei Takao¹ (1. Nippon Sport Science
University)

11:32 AM - 11:47 AM

[学校保健体育-A-09] 新型コロナウイルス感染症対策のため
にオンデマンド型遠隔授業を活用した
体育実技系必修科目の検討 (介,生)

*Tomoaki Bunya¹, Tomomi Monri¹, Takeshi
Miyakawa¹ (1. Kawasaki University of
Medical Welfare)

11:48 AM - 12:03 PM

[学校保健体育-A-10] 大学における教員養成課程での身体運
動文化としてのダンス教育の重要性
(介,ア,教,パ)

*Masae Yamazaki¹ (1. kanazawa
university)

12:04 PM - 12:19 PM

第1会場

Oral (Theme) | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をい
かに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

Chair: Wakaki Uchida (Kyushu University)

11:00 AM - 11:47 AM 第1会場 (3号館3階301教室)

[競技スポーツ-A-01] もしアスリートがパーソナルコーチ
ングを受けたら (教,方)

*Kenryu Aoyagi¹ (1. Kanto Gakuin

University, College of Economics)

11:00 AM - 11:15 AM

[競技スポーツ-A-02] 大学における学習支援は競技スポーツ
を教育に結びつけられるのか (哲)

*Takaharu Kishii¹ (1. Univ. of Tsukuba)

11:16 AM - 11:31 AM

[競技スポーツ-A-03] A case study of issue on junior athlete
development system in speed skating

*Shunichi Onodera¹, Toshinobu Kawai²

(1. Graduate School of Comprehensive
Human Science, University of Tsukuba, 2.
Faculty of Health and Sport Science,
University of Tsukuba)

11:32 AM - 11:47 AM

第2会場

Oral (Theme) | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をい
かに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 口頭発表②

Chair: Riki Sukou (Japan Women's College of Physical Education)

11:00 AM - 11:47 AM 第2会場 (3号館4階401教室)

[競技スポーツ-A-04] 絶対的状況下におけるアスリート支援
のための アスリート・ターミナルケア
とスポーツチャプレンの機能 (心)

*maeda shogo¹ (1. Toyo Univ.)

11:00 AM - 11:15 AM

[競技スポーツ-A-05] トップスポーツにおけるスポーツ
ファーマシストのあり方 (社)

*Sachiko Otsuka¹, Jun Seino^{2,3}, Yuki
Oshiba⁴, Mitsugi Ogata² (1. NTT Medical
Center Tokyo, 2. Faculty of Health and
Sport Sciences, University of Tsukuba, 3.
R&D Center for Smart Wellness City
Policies, University of Tsukuba, 4.
Yamanashi Gakuin University Faculty of
Health and Nutrition)

11:16 AM - 11:31 AM

[競技スポーツ-A-06] 幼少期における競技経験が大学野球選
手の競技レベルに及ぼす影響 (方,発)

*Ryuto Fuke¹, Yoshimitsu Kohmura²,
Kazuhiro Aoki¹ (1. Juntendo University
Graduate School, 2. Juntendo University)

11:32 AM - 11:47 AM

第3会場

Oral (Theme) | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】 大学体育の授業をいかに良
質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】 口頭発表①

Chair: Kaori Kimura (Tokai Gakuen University)

11:00 AM - 12:19 PM 第3会場 (3号館4階402教室)

[学校保健体育-A-01] 医療系大学生における健康に関連する
心と身体のフィットネス (保,発,生)

*Tetsuya Mizuno¹, Yosuke Mizuno², Tatsuo
Yagi³, Hideki Takaoka⁴, Miki Kurihara⁵,
Takuma Wada⁶, Seiji Yoshitake⁷ (1.
Tokyo Medical and Dental University, 2.
Doctoral Program in Sociology Graduate
School of Human Sciences, Sophia Univ.,
3. Tokai University, 4. Keiai University, 5.
Sophia University, 6. Izumo Hokuryo
Junior & High School, 7. Graduate School
of Comprehensive Human Sciences,
Tsukuba Univ.)

11:00 AM - 11:15 AM

[学校保健体育-A-02] コロナ禍における学生の健康及び生活
に関する調査からみるアフターコロナ
への試み (スポーツ栄養)

*Hatsuho Zeniya¹, Saiko Shirakawa² (1.
International Budo University, 2. Showa
Women's University)

11:16 AM - 11:31 AM

[学校保健体育-A-03] 大学生の対処資源測定尺度の作成
(心)

*Shunsuke Sakata¹, Namika Motoshima²,
Takumi Nakasuga³, Kojiro Matsuda⁴,
Takashi Naito⁵, Yoshio Sugiyama⁶ (1.
Yokohama college of commerce, 2.
Kyushu Sangyo Univ., 3. Hyogo Univ. of
Teacher Education, 4. Kumamoto Gakuen
Univ., 5. Hokkai-Gakuen Univ., 6. Kyushu
Univ.)

11:32 AM - 11:47 AM

[学校保健体育-A-04] 大学体育授業の主観的恩恵に及ぼす学
修者個人要因および学修状況要因の検
討 (心)

*Junichi Nishida¹ (1. Kindai Univ.)

11:48 AM - 12:03 PM

[学校保健体育-A-05] 大学体育授業での心拍計を用いた積極
性の評価は授業中の心拍数および授業
後の快感情を増加させる (バ,生)

*Yoichi Ohta¹, Kyohei Takahashi² (1.
Shizuoka University of Welfare, 2.

Kumamoto Gakuen University)
12:04 PM - 12:19 PM

Oral (Theme) | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

Chair: Kyosuke Uchida (Tokai University)

Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 12:03 PM 第6会場 (2号館1階11教室)

[生涯スポーツ-A-01] 中学校運動部活動の地域移行における学校及び地域関係者の認識と課題（政,社）

*Kotaro Asahara¹ (1. NSSU)

11:00 AM - 11:15 AM

[生涯スポーツ-A-02] 運動部活動における学校と地域スポーツ団体との連携に関する研究：組織間関係論の視点から（経）

*Makiko Sakai¹, Seiichi Sakuno² (1. Waseda Institute for Sport Sciences, 2. Faculty of Sport Sciences, Waseda University)

11:16 AM - 11:31 AM

[生涯スポーツ-A-03] 運動部活動のステークホルダー間の関係構造に関する検討（教）

*Hiroshi Takagi¹, Koji Ishii¹, Naoki Suzuki¹ (1. Tokyo Gakugei University)

11:32 AM - 11:47 AM

[生涯スポーツ-A-04] 部活動における教師の成長過程とその影響要因に関する研究（教,経）

*Makoto Ito¹, Ebbe Daigo¹, Norihiro Shimizu¹ (1. Tsukuba University Sport Management Lab)

11:48 AM - 12:03 PM

11:00 AM - 11:15 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 12:03 PM 第6会場)

[生涯スポーツ-A-01] 中学校運動部活動の地域移行における学校及び地域関係者の認識と課題（政,社）

子どもを主語として円滑な移行のための条件に関する考察

*Kotaro Asahara¹ (1. NSSU)

本研究は中学校運動部活動地域への移行において子どもたちにとって最善のあり方を実現させるための政策を見出す事を基本理念とし、2023年度からの「休日の中学部活地域移行」において生徒誰もが運動部活を選択でき、その継続を可能とする地方自治体の政策について考察することを目的とした。

方法：フィールドをM市（24万人）とし、対象者を部活顧問、競技団体役員、スポーツ推進員役員、PTA役員、総合型地域スポーツクラブ役員、公民館の役員、地区スポーツ協会役員に半構造化インタビュー調査を実施した。

結果（N=9）：職務は会長4、理事長・理事3、その他2、中学校での運動部活動経験有8、公認指導者資格保有2、審判資格保有5であった。休日の地域移行を知っていた5、なんとなく知っていた4、所属団体の地域移行への協力についてとてもそう思う6、ややそう思う3、具体的なアクションについては検討をしている2、検討をしようとしている2、アクションはない4、経済的・時間的理由で部活動を諦めざるを得ない生徒が出ないようにする事について、諦めるようなことは絶対あってはならないと思う5、ある程度出ても仕方ないと思う4であった。

インタビューでは、移行を受け入れる側の「地域」の定義がされていない事、指導者の質・量の確保・賠償責任保険の整備、練習施設確保・使用料減免、山間部と市街部との格差等が課題として示された。また、学校と地域がコミュニティスクールにおいて従来から積み上げてきた関係を活かす事、今回の移行を契機として、学校課題のみならず地域課題の解決や生徒自らが考えて運営する能力を高める等、発想の元となる意見が得られた。

まとめ：地域部活動では、①スポーツで仲間と楽しむ、②競技力向上に応える、③小学生や地域との交流、の3Wayが見えてくる。今後、中学生・その保護者、スポーツ少年団役員等へのインタビューを行う等、さらなる検討が必要である。

11:16 AM - 11:31 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 12:03 PM 第6会場)

[生涯スポーツ-A-02] 運動部活動における学校と地域スポーツ団体との連携に関する研究：組織間関係論の視点から（経）

連携が生まれる条件、プロセス、結果に着目して

*Makiko Sakai¹, Seiichi Sakuno² (1. Waseda Institute for Sport Sciences, 2. Faculty of Sport Sciences, Waseda University)

学校運動部活動は、令和5（2023）年度より週末の活動が地域へ移行されることで検討が進められ、全国で推進事業が開始されている（スポーツ庁, 2021：2022）。しかし、運動部活動を地域へ移行するためには、近隣の総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブと略す）や民間スポーツ団体などのパートナーが必要であり、学校としてはパートナーをどのようにして見つけるのか、何をどのように進めていけばよいのかなどの具体的な課題がある（作野, 2013）。それらの課題について、先行研究では、事例から導き出された連携の条件や段階的移行方法、地域ぐるみの総合型クラブ設立の経緯などから個別具体的な示唆は得られるものの、組織間関係論の視点からの知見は十分に得られていない。

本研究では、運動部活動における学校と地域スポーツ団体（総合型クラブや競技団体、行政組織等）との連携について、連携が生まれる条件、連携のプロセスおよび結果の3つの観点に着目し（Gray&Wood, 1991; Thomson and Perry, 2006）分析を行った。また分析枠組みとして、非営利ヒューマンサービス組織における組

組織間関係を段階的に表した Bailey and Koney(2000)の「戦略的提携開発の4つのフェーズ」を援用した。データは、日本スポーツ協会等による定期刊行誌、新聞、スポーツ庁資料等に掲載された学校と地域スポーツ団体との連携事例を対象とし、関係組織との連携の内容（型）、連携の契機や課題、関係性の経年変化などを抽出した。発表当日は結果の詳細について報告する。

11:32 AM - 11:47 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 12:03 PM 第6会場)

[生涯スポーツ-A-03] 運動部活動のステークホルダー間の関係構造に関する検討（教）

*Hiroshi Takagi¹, Koji Ishii¹, Naoki Suzuki¹ (1. Tokyo Gakugei University)

運動部活動は教科指導を補完し、日本の教育を支える重要な要素となっている。スポーツ庁（2018）が発表した「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」において「公益財団法人日本体育協会、地域の体育協会、競技団体及びその他のスポーツ団体は、総合型地域スポーツクラブやスポーツ少年団等の生徒が所属する地域のスポーツ団体に関する事業等について、都道府県もしくは学校の設置者等と連携し、学校と地域が協働・融合した形での地域でのスポーツ環境の充実を推進する」と述べた。経済産業省（2021）が2021年6月に発表した「地域×スポーツクラブ産業研究会第1次提言」においては、日本のスポーツ基盤を支えてきた運動部活動の転換を推進する為には、サービス業としての地域スポーツクラブが成長し持続可能性を維持する「社会システムの再設計」の必要性を主張した。このように、政府は学校外のステークホルダーを活用・連携して外部化をする方向性を持つことがわかる。学校を取り巻く環境の変化により、運動部活動の担い手は学校内に留まらず、総合型地域スポーツクラブ、スポーツ少年団、地域住民などのステークホルダーへと広がりを見せている。本研究では、レビューの対象となる運動部活動に関する研究を整理し、運動部活動を構成するステークホルダーを抽出し、その変遷と課題を整理する事を目的とした。明らかになったステークホルダーの課題の要因や背景について、運動部活動を取り巻く社会や学校の状況を踏まえながら検討を進めた結果、運動部活動を相互に影響を及ぼし合うステークホルダーの中で振る舞う「システム（INCOSSE,2015）」として可視化をした。システムとしての特性を持った問題であれば適用することができるため、組織など人間が介在するシステムの設計にも有効であると考えた。

11:48 AM - 12:03 PM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 12:03 PM 第6会場)

[生涯スポーツ-A-04] 部活動における教師の成長過程とその影響要因に関する研究（教,経）

インタビュー調査から

*Makoto Ito¹, Ebbe Daigo¹, Norihiro Shimizu¹ (1. Tsukuba University Sport Management Lab)

学校部活動が教育課程内の教科との関連が図られるものであることから、教師も部活動研究の対象としてこれまで多くの先行研究が行われてきた。部活動と教師に関する研究は、生徒に効果的な部活動を提供するための人的資源として教師に関心を向けた研究と、教師の過剰労働の原因として部活動に関心を向けた研究に大別される。ところが、教師に関心の中心に置き、部活動に関与することで教師自身が得る効果についてはこれまで関心が向けられてこなかった。神谷（2015）は、部活動は教師にとって自身の教育活動を振り返り新たな課題に気づくための「自己研修の場」といえると論じているが、教師教育、力量形成の先行研究においても、部活動における顧問教師の成長について検討した研究は見られない。以上の背景から本研究は、これまで部活動に意義を見出して関与してきた教師が、顧問教師として部活動でどのような経験をし、どのように自らを成長させてきたのか

を明らかにすることで、教師にとって部活動がどのような力量形成の場になり得るのかを検討する。予備調査として行った自記式質問紙調査の結果から、顧問教師は部活動で「競技指導者として」、「教師として」の二つの成長の様相を見せることが示された。また、類似した経験であっても成長の様相が異なることや、負担感を獲得してしまう場合があることが示唆された。このことから、部活動での経験そのものだけではなく、教師の信念などの個人的な要因、教師間関係などの学校の組織的な要因の影響によって成長の様相が異なる可能性が考えられる。そこで、中学校または高等学校の教師を対象に半構造化インタビューを行い、教師が部活動で成長する過程を記述し、その成長過程に影響する要因を検討した。本発表では、インタビューテキストを SCAT 分析を用いて理論化し考察を行った結果を報告する。

Oral (Theme) | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

Chair: Kiyokatsu Watahiki

Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第7会場 (2号館1階12教室)

[生涯スポーツ-A-05] 共生社会ホストタウンと公共スポーツ施設経営（経）

*Kosei Uehara¹, Chihiro Kanayama² (1. Ritsumeikan Univ., 2. Ritsumeikan Univ.)

11:00 AM - 11:15 AM

[生涯スポーツ-A-06] 障害者の地域参加と共生的スポーツコミュニティへの参加との関係（ア）

*Nozomi IIDA¹, Mayumi Saito² (1. Tsukuba Univ., 2. Tsukuba Univ.)

11:16 AM - 11:31 AM

[生涯スポーツ-A-07] 障害者および障害者スポーツに対する意識の変化に関する研究（ア）

*Motoaki Fujita¹ (1. Nihon Fukushi University)

11:32 AM - 11:47 AM

11:00 AM - 11:15 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第7会場)

[生涯スポーツ-A-05] 共生社会ホストタウンと公共スポーツ施設経営（経）

インクルーシブな活動の創出に向けた施設類型化の試み

*Kosei Uehara¹, Chihiro Kanayama² (1. Ritsumeikan Univ., 2. Ritsumeikan Univ.)

東京2020パラリンピック開催に際し政府主導のもとで取り組まれた共生社会ホストタウンは、①パラリンピアンとの交流、②心のバリアフリー、③ユニバーサルデザインの街づくりという3つの指針を通して、開催都市以外でも大会波及効果を取り込むことを見据えた政策である。共生社会ホストタウンに登録されている自治体では、それぞれの特徴を生かしつつ地域において共生社会の実現を目指した取り組みを展開してきた。政策という環境は公共スポーツ施設経営に影響を及ぼす。またスポーツ組織の環境適応行動は戦略との調和が重視される（山下,2006）。本研究は、共生社会ホストタウンという環境下における該当市区町の公共スポーツ施設に着目し、施設が共生社会ホストタウンの活動をどのように捉えてインクルーシブな活動を生み出そうとするのかを把握することを目的とした。組織は外部環境からさまざまな文化的影響を受け、組織文化として「言語的シンボル」、「行動的シンボル」、「物理的シンボル」の3つのシンボルを表出する（坂下,2002）。本研究では、施設の外部環境として共生社会ホストタウンの3つの指針を取り上げ、施設の内部特性として組織文化の3つのシンボルを取り上げた。共生社会ホストタウン登録情報（首相官邸 web,2021）より該当市区町の具体的な取り組みを抽出し、施設の外部環境と内部特性から9つのマトリックスに整理することで30項目にまとめた。また、共生社会ホストタウンが目指すインクルーシブな活動を組織有効性として捉え、障害者が地域の公共スポーツ施設を利用するための15項目を設定した。調査は、共生社会ホストタウンに登録されている105の市区町に所在する、一般公共スポーツ施設及び障害者優先スポーツ施設から200施設を選抜して郵送法にて行う。外部環境と内部特性を示す30項目により施設類型化を図り、類型別の組織有効性を把握することとした。

11:16 AM - 11:31 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第7会場)

[生涯スポーツ-A-06] 障害者の地域参加と共生的スポーツコミュニティへの参加との関係（ア）

*Nozomi IIDA¹, Mayumi Saito² (1. Tsukuba Univ., 2. Tsukuba Univ.)

障害者基本法では2011年の一部改正から、「地域社会における共生」が登場する。しかし、障害者が参加するコミュニティは閉鎖的なものに止まるなど、障害者を包摂した共生社会の実現には未だ遠い。ところで、障害者を包摂したコミュニティ形成において、ソーシャルキャピタルの概念の利用可能性が示されている(Chenoweth & Stehlik, 2004)。また、ソーシャルキャピタルの蓄積は抑うつや QOL（生活満足度）などの心理社会的健康にも関係するとされ、障害者自身の心理社会的健康にも寄与できることが推察できる。そうしたソーシャルキャピタルの醸成手段として度々スポーツコミュニティが取り上げられるが、障害者はそこに現れない。ましてや共生的スポーツコミュニティへの参加実態や、それにより障害者の心身にもたらされる影響は明らかになっていない。そこで本研究では、障害者の共生的スポーツコミュニティへの参加状況と、個々の地域参加との関連の傾向を明らかにすることを目的とした。調査対象はスポーツコミュニティ参加者とした。障害者と健常者がともにスポーツ活動を行うコミュニティと障害者のみのスポーツコミュニティ、健常者のみのスポーツコミュニティの3群に分けて検討した。調査方法は質問紙調査とし、調査項目は地域参加の様子としてソーシャルキャピタルに基づく項目、並びに心理社会的健康に関する項目として生活満足度と主観的幸福感に関する項目とした。加えて質問紙調査を補うものとして、コミュニティの構成員に関する質問を含めた面接をコミュニティ代表者に対して行った。その結果、共生的スポーツコミュニティに参加することは、地域に参加した生活の充足と相互に関連することが示唆されたことから、多様で共生的なスポーツコミュニティへの参加が、障害者の地域参加に貢献し得る可能性について報告する。

11:32 AM - 11:47 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第7会場)

[生涯スポーツ-A-07] 障害者および障害者スポーツに対する意識の変化に関する研究（ア）

*Motoaki Fujita¹ (1. Nihon Fukushi University)

東京でのパラリンピック開催が決定後、多くの人々がパラリンピックや障害者スポーツに注目するようになった。新聞やテレビにおいてもパラリンピックに関する話題が多く取り上げられた。これらが人々の意識などに何らかの影響を与えていることが推察される。人々の障害者に対する意識がより肯定的になることは、パラリンピック自国開催による無形のレガシーの一つと言える。そこで、本研究ではパラリンピック国内開催が決定して以降、障害者や障害者スポーツに対する人々の意識がどのように変化したかを明らかにした。

本研究では2014年、2016年、2018年、2019年、2020年、2021年に障害者および、障害者スポーツに関するインターネットを利用したアンケート調査を実施した。回答者は委託した社会調査会社に登録されているモニター約130万人から希望した2066名（各年とも同じ）であった。質問項目は障害者に関する質問が5問、障害者スポーツに関するものが5問計10問に対して5件法にて回答してもらった。

その結果、障害者に対する意識も、障害者スポーツに対する意識も徐々にポジティブになってきていることが明らかになった。とりわけ2021年の調査結果は過去の調査結果と比較すると高い水準であった。

パラリンピック国内開催決定以降、テレビや新聞、SNS等のメディアで取り上げられることが増えたこと、学校でパラリンピック教育が数年にわたって展開されたこと、各地で障害者スポーツ啓発イベントが開催されたこと、そして、2021年にパラリンピックが東京で開催されたことなどが影響していると考えられる。

Oral (Theme) | 健康福祉研究部会 | 【課題 A】健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題 A】口頭発表①

Chair: Tetsuhiro Kidokoro (Nippon Sport Science University)

Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第8会場 (2号館2階21教室)

[健康福祉-A-01] 新型コロナウイルス感染症流行下における産後女性の身体活動量は健康関連 QOLに影響するか？ (ア)

*Yumi Nomura¹, Tomoko Araki² (1. Chiba Institute of Technology, 2. Osaka Yukioka College of Health and Science)

11:00 AM - 11:15 AM

[健康福祉-A-02] 発散型の運動プログラムがストレスや脳疲労に及ぼす効果 (介)

*Moritoshi Matsuzaki¹, Miki Tachiyama² (1. Shimonoseki City University, 2. MikiFunnit Co.Ltd.)

11:16 AM - 11:31 AM

[健康福祉-A-03] スキップ動作のイメージに伴う気分と身体感覚に関する一考察 (介, 発, 心)

*Junko Kikuchi¹, Mayumi Kuno Mizumura² (1. Ochanomizu Univ.graduate school, 2. Ochanomizu Univ.)

11:32 AM - 11:47 AM

11:00 AM - 11:15 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第8会場)

[健康福祉-A-01] 新型コロナウイルス感染症流行下における産後女性の身体活動量は健康関連 QOLに影響するか？（ア）

*Yumi Nomura¹, Tomoko Araki² (1. Chiba Institute of Technology, 2. Osaka Yukioka College of Health and Science)

【背景】身体活動は母子の健康に好ましい影響を与えるが、出産後は身体活動量が減少することが指摘されている。新型コロナウイルス感染症流行により世界的な身体活動不足が課題となっているが、産後女性の身体活動の実態や健康への影響については明らかでない。本研究では、感染症流行下における身体活動レベルによる産後女性の健康関連 QOLの差異について検討することを目的とした。

【方法】2020年4月以降に出産した産後1年未満の女性590名を対象に、2021年3月から2021年10月の期間にインターネット調査を実施した。身体活動量の評価には国際標準化身体活動質問票 (IPAQ-SF)を用い、1週間あたりの総身体活動量と活動レベルを算出した。また、健康関連 QOLの尺度として The Short Form-12 Health Survey (SF-12v2)を用いた。IPAQ-SFの3つの活動レベルを再定義し、Moderate levelと High levelを活動群に統合し、Low levelを低活動群として健康関連 QOLの比較を行った。

【結果】1週間あたりの総身体活動量の平均は19.3メッツ・時/週であった。研究参加者の活動レベルは活動群が54.1%、低活動群が45.9%に該当した。活動群は非活動群に比べ、SF-12v2の下位尺度である身体機能、体の痛み、全体的健康感、日常役割機能（身体）、日常役割機能（精神）、社会生活機能、活力のスコアが有意に高かった。心の健康については統計学的有意差は認められなかった。また、身体的健康および精神的健康のサマリースコアは活動群は非活動群に比べて有意に高かった。

【考察および結論】本研究の結果は、身体活動と健康関連 QOLは正の関連を有するという先行研究の結果を支持し、感染症流行下においても一定以上の身体活動を実施することは産後女性の心身の健康に好ましい影響をもたらす可能性が示唆された。

11:16 AM - 11:31 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第8会場)

[健康福祉-A-02] 発散型の運動プログラムがストレスや脳疲労に及ぼす効果（介）

*Moritoshi Matsuzaki¹, Miki Tachiyama² (1. Shimonoseki City University, 2. MikiFunnit Co.Ltd.)

【目的】本研究では、医療・福祉現場などに勤務する女性を対象に、発散型の運動プログラム（フリーダムコラボレーションダンス：FCD）が、ストレスや脳疲労に及ぼす効果について検証すると事を目的とした。【方法】対象は、医療・福祉現場などに勤務する女性33名（37.3±8.0）とした。発散型の運動プログラムは、チアダンスをベースにした運動プログラム（FCDレッスン）で、スタジオにて集合対面型で行う「対面 FCDレッスン」を週2回、web上に提供された録画映像を視聴しながら実施する「自宅 FCDレッスン」を週4回実施する事とした。実施期間は4週間とした。実施期間前後に、精神心理的指標として、脳疲労診断16ヶ条、内田クレペリン検査、POMS2、アテネ不眠尺度、生理的变化について臨床検査（生化学検査、血液学的検査）、特殊検査（血中プラズマローゲン濃度、血中カテコールアミン濃度）を行った。【結果考察】脳疲労診断16ヶ条のスコアは、有意に低下し、脳疲労の軽減が示唆された。アテネ不眠尺度のスコアは、有意に低下し、不眠状態の改善が示唆された。POMS2については、ネガティブな下位尺度が有意に低下し、ポジティブな下位尺度は有意に上昇した。これらのことからネガティブな感情が抑制され、ポジティブな感情が向上することが示唆された。臨床検査、特殊検査に変化は見られなかったが、対面 FCDレッスンの受講が7回以上の14名について検証したところ、血漿プラズマローゲン濃度は、3.5±1.1 mg/dlから4.0±1.3 mg/dlへ有意に上昇し、定期的な FCD実施が、脳疲労を改善させることが示唆された。【結論】週2回程度の定期的な FCDレッスンへの参加により、ストレスや脳疲労を改善さ

せる可能性が示唆された。

11:32 AM - 11:47 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第8会場)

[健康福祉-A-03] スキップ動作のイメージに伴う気分と身体感覚に関する一考察 (介, 発, 心)

*Junko Kikuchi¹, Mayumi Kuno Mizumura² (1. Ochanomizu Univ.graduate school, 2. Ochanomizu Univ.)

スキップ動作は跳躍による全身のリズミカルな移動運動で、動作を行うことにより、快感情などの情動が惹起する可能性が示唆される。本研究では、動作に伴う気分や感情の変化を歩行と走行、スキップ動作について調査し、スキップ動作へのイメージおよびスキップ動作中の主観的な身体イメージと比較することにより、スキップ動作との関連が強いイメージについて考察する。対象は、18～65歳の男女114名（46.04歳 SD11.76、男性41名（46.4歳 SD11.19）、女性71名（45.9歳 SD12.27））で調査用紙と google フォームを併用し調査を行い、回答を得た。「快感情」「リラックス感」「不安感」の3つの下位尺度で測定するポジティブ感情測定尺度（MCL-S.2）では、「快感情」の4項目すべてで、スキップ動作が歩行と走行に対して有意に高い値（ $p < 0.001$ ）を示した。「リラックス感」では歩行が歩行走行に対して2項目で有意に高く（ $p < 0.001$ ）、ほかの2項目でスキップが歩行走行に対して有意に高い値（ $p < 0.001$ ）、「不安感」では4項目すべてでスキップが歩行走行に対して有意に低い値（ $p < 0.05$ ）であった。スキップは「快感情」「不安感」「リラックス感」すべての項目で歩行と走行に対して有意な差が見られたが、歩行と走行とでは「リラックス感」（ $p < 0.001$ ）のみに有意な差が示された。対象を、週一回以上定期的に運動している人と、運動を特にしていない人の2群に分けて比較したところ、2群間の有意差は走行の「快感情」「リラックス感」に見られたが、スキップのすべての項目において2群間の差はなかった。またスキップ動作の主観的イメージでは、女性の方が男性よりも「嬉しい」「リズミカル」「楽しい」で有意に高い値（ $p < 0.05, 0.01$ ）を、また男性の方が「恥ずかしい」で有意に高い値（ $p < 0.01$ ）を示した。

Oral (Theme) | 健康福祉研究部会 | 【課題 A】 健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題 A】口頭発表②

Chair: Masashi Asakura

Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第9会場 (2号館2階22教室)

[健康福祉-A-04] 大学入学時の体力レベル別にみた精神的健康度の変化（体力学）

*Yuichi Nakahara-Gondoh¹, Kenji Tsunoda², Toshihiko Fujimoto³ (1. Fukuoka Pref. Univ., 2. Yamaguchi Pref. Univ., 3. Tohoku Univ.)

11:00 AM - 11:15 AM

[健康福祉-A-05] A Study on "Jubilo-Meshi," a Health and Wellness Project of Industry-Government-Academia-Private Sector Collaboration

*Kazuko Takahashi¹, Ryoichi Ema¹ (1. SHIZUOKA SANGYOU UNIVERSITY)

11:16 AM - 11:31 AM

[健康福祉-A-06] Handbuch Gesundheitssport (2006) に示されたドイツのスポーツ健康科学研究による運動と健康増進・体力向上との関係についての研究的アプローチ（政,介,社）

*Shigeru Tada¹ (1. no institution)

11:32 AM - 11:47 AM

11:00 AM - 11:15 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第9会場)

[健康福祉-A-04] 大学入学時の体力レベル別にみた精神的健康度の変化（体力学）

入学時から卒業間際にかけての追跡研究

*Yuichi Nakahara-Gondoh¹, Kenji Tsunoda², Toshihiko Fujimoto³ (1. Fukuoka Pref. Univ., 2. Yamaguchi Pref. Univ., 3. Tohoku Univ.)

【目的】大学入学時の体力レベルの違いによって、卒業時の精神的健康度に変化がみられるかどうかについて検討した。

【方法】2018年4月に入学した大学生を対象に、入学直後に文部科学省の新体力テスト（12歳～19歳対象の全8種目）を実施し、2022年2月（卒業間際）の追跡調査に参加した61名を分析対象とした。なお、本対象者は2年次の3月以降、コロナ禍で過ごした特徴を有す。体力レベルは、新体力テストの総合評価基準表（A～Eの5段階評価）を用い、A～Cを中高体力群（45名）、D・Eを低体力群（16名）と定義した。精神的健康度としてPOMS2の各指標を用いた。統計解析には、二元配置共分散分析を用い、性別と入学直後の総活動量（IPAQ-short）を調整した。

【結果】入学直後のPOMS2の各指標には、いずれも有意な群間差はなかった。追跡調査の結果、「怒り－敵意」、「抑うつ－落込み」、「総気分得点」において交互作用が認められた。単純主効果検定の結果、入学時から卒業間際にかけて、低体力群のみ「怒り－敵意」が有意に上昇（悪化）した一方で、中高体力群のみ「抑うつ－落込み」が有意に低下（改善）した。また、卒業間際の比較において、低体力群の「怒り－敵意」と「総気分得点」は、中高体力群に比べて有意に高値（不良）であった。

【結論】大学入学時の体力レベルの違いによって、POMS2の複数の指標において異なる時間変化が認められ、中高体力群は、低体力群に比して精神的健康度を良好に保っていることが示された。本対象者は、大学生活の半分以上をコロナ禍で過ごした学生である。このような困難な環境下にあっても、体力レベルが高いことは精神的健康を良好に保つ上で、一つの重要な保護因子となり得ることが示唆された。

11:16 AM - 11:31 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第9会場)

[健康福祉-A-05] A Study on "Jubilo-Meshi," a Health and Wellness Project of Industry-Government-Academia-Private Sector Collaboration

*Kazuko Takahashi¹, Ryoichi Ema¹ (1. SHIZUOKA SANGYOU UNIVERSITY)

本研究は、「ジュビロ飯」誕生までの経緯と波及効果について明らかにする事を目的にする。本プロジェクトは、磐田市、静岡産業大学、静岡県立農林環境専門職大学、ジュビロ磐田、磐田商工会議所、市内企業との産学官民協働により、食とスポーツによる地域の健康向上と経済活性化を目指す。2020年から1年かけて討議を重ね「ジュビロ飯」を誕生させた。本プロジェクトの目的は、①健康課題の解決（フレイル予防）②運動習慣の改善（スポーツ実施率の向上）③企業連携による産業振興と新たな産業創出である。誕生までの経緯、波及効果、今後の挑戦等について各団体担当者へ半構造面接を行った。その結果、次のことが明らかになった。前述の①②では、ジュビロ飯食前にはスクワット等の運動やベジファーストの習慣化の推奨により、運動と食教育を推進できた。しかし、フレイル予防やスポーツ実施率向上については検証できていない。③では次の点で成果がみられた。磐田市初の産学官民連携による事業化。「ジュビロ飯」の展開先拡大（2大学の学食・磐田グランドホテルレストラン・市内店舗・保育園等）。地産地消による地域の食材消費。静岡産業大学における卒業研究（市民の健康増進に繋がる知見提案）や学生や高校生による市民のスポーツ実施率向上とメニューのアイデア創出。情報

発信（新聞報道、磐田市・ジュビロ磐田・静岡産業大学でのHPやSNS）。④他の団体での類似の企画に繋がった。以上の事より、磐田市が「スポーツのまち」イメージ日本1になった事が追い風になり、「ジュビロ飯」は市内に定着すると共に、様々な広がりをもって拡散した事が明らかになったが、「食とスポーツ」による地域の健康向上への効果検証は今後の課題である。

11:32 AM - 11:47 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第9会場)

[健康福祉-A-06] Handbuch Gesundheitssport (2006) に示されたドイツのスポーツ健康科学研究による運動と健康増進・体力向上との関係についての研究的アプローチ（政,介,社）

*Shigeru Tada¹ (1. no institution)

2006年版は、1998年版を全面的に改定したものになっている。いずれの版でも、K.Boes（フランクフルト、カールスルーエ）、W.Brehm（バンベルク）の二人が編者になり、ドイツ全域に展開された研究機関に籍を置くスポーツ健康科学、スポーツ医学、医学、公衆衛生、社会学、教育学、心理学を専門とする38名(第1版)、39名(第2版)の研究者たちが筆を取っている。また巻末には、1970年代に遡る約1330点（第1版）、1500点（第2版）の文献表が収められている。このように平面的、時間的両面からスポーツと健康の関係を捉えた研究として、ハンドブックは、それぞれ1990年代後半、2000年代半ばの視点から両者の関係を捉えたドイツのスポーツ健康科学研究について概観を与えるものとなっている。

他方、第1版と第2版では、著者が半数近く入れ替わっている。第2版は編者自身が語るように、全体的に新たに健康スポーツのテーマを捉え直したものとなっている点が注目される。この間、10年に足りないとはいえ、21世紀に入っての健康とスポーツとの関係を巡る新たな状況の展開が基礎になっていることが予想される。編者たちの言葉によれば、それは社会法典第5巻における2000年の「予防に関する章」の法改定や、リスク因子発現の予防、病の早期発見、重症化の遅延のための包括的な法的基礎となる2004の「予防法」草案の策定として現れている。

本発表では、以上のようなヘルスケアを巡る社会の動きを念頭において新たに編集されたハンドブック『健康スポーツ』の第2版（2006年）を論究の中心において、運動と健康増進・体力向上との関係について、ドイツのスポーツ健康科学研究がどのようなアプローチを試みているか、その際に研究の枠組みとなっている事項をまとめることで、議論の話題を提供していきたい。後期産業発展国として、日独両国は多くの課題を共有しており、示唆を受けることができる論点もあると考えられるからである。

Oral (Theme) | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題 A】口頭発表①

Chair: Fumie Yamazaki (Niigata University of Health and Welfare)

Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第10会場 (2号館4階45教室)

[スポーツ文化-A-01] 大学生アスリートはどのように日焼け予防を行っているのか？（心,社）

*Aeri Machida¹, Kyosuke Enomoto¹, Yuichi Matsubara², Hirokazu Arai³ (1. HOSEI Univ., 2. OSAKA OHTANI Univ., 3. HOSEI Univ.)

11:00 AM - 11:15 AM

[スポーツ文化-A-02] 第11回オリンピック冬季競技大会（1972/札幌）閉会後における恵庭岳滑降競技場跡地の復原に関する一考察（史）

*Soya Ishizuka¹ (1. Japan Sport Association)

11:16 AM - 11:31 AM

[スポーツ文化-A-03] コロナ禍における「ホストタウン事業」を通じた学生の国際理解に関する研究（人）

*Ryu Sakamoto¹ (1. University of Tsukuba)

11:32 AM - 11:47 AM

11:00 AM - 11:15 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第10会場)

[スポーツ文化-A-01] 大学生アスリートはどのように日焼け予防を行っているのか？（心,社）

*Aeri Machida¹, Kyosuke Enomoto¹, Yuichi Matsubara², Hirokazu Arai³ (1. HOSEI Univ., 2. OSAKA OHTANI Univ., 3. HOSEI Univ.)

本研究の目的は、運動部に所属する大学生アスリートを対象に、競技活動中の日焼け予防行動の変容ステージ、実際に行っている日焼け予防行動について調査を行い、大学生アスリートの日焼け予防行動の実態を探索的に調査することであった。測定項目は、人口統計学的データ、競技活動中の日焼け予防行動の変容ステージ、および実際に行っている日焼け予防行動についてであった。日焼け予防行動の変容ステージについては、前熟考期「私は現在、競技活動において日焼け予防をしていない。また、これから先もするつもりはない」、熟考期「私は現在、競技活動において日焼け予防をしていない。しかし、近い将来(6か月以内)に始めようとは思っている」、準備期「私は現在、競技活動において日焼け予防をしている。しかし、定期的ではない」、実行期「私は現在、競技活動において定期的に日焼け予防をしている。しかし、始めてから6か月以内である」、維持期「私は現在、競技活動において日焼け予防をしている。また、始めてから6か月以上継続している」の5項目で尋ねた。実際に行っている日焼け予防行動については、「顔用の日焼け止めを使用」「帽子を着用」などの9項目で尋ねた。分析の結果、前熟考期が67.4%と最も多く、実行期が3.1%と最も少なかった。また、日焼け予防ステージについて、性別間では、男性は女性に比べ、未実施群(前熟考期・熟考期)の割合が有意に多く(男性77.6%/女性50.0%)、実施群の割合が有意に少なかった(男性22.4%/女性50.0%)。競技場所間では、室内では未実施群の割合が95.8%、実施群の割合が4.2%と未実施群の割合が多く、室外では未実施群の割合が61.3%、実施群の割合が38.7%と室内と比較して両群の間の差は小さかった。学年別(1年生/2-4年生)では有意な差が見られなかった。このことから、性別間や競技場所間で日焼け予防に関する準備性に差があることや、学年は日焼け予防行動と関連しない可能性が示された。

11:16 AM - 11:31 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第10会場)

[スポーツ文化-A-02] 第11回オリンピック冬季競技大会(1972/札幌)閉会後における恵庭岳滑降競技場跡地の復原に関する一考察(史)

行政文書および大会組織委員会議事録の検討を中心に

*Soya Ishizuka¹ (1. Japan Sport Association)

1972年に札幌で開催された第11回オリンピック冬季競技大会(以下、札幌大会)では、スキー競技の滑降種目に特化した会場として恵庭岳滑降競技場が建設されたが、大会終了後には競技施設を撤去し、跡地に植林を施す復原工事が行われた。これはオリンピック・ムーブメントにおける環境保護対策の初事例とされている。先行研究では、復原工事に至るまでの経緯について明らかにされているが、競技場跡地の処理方策決定以降の競技場竣工に至る経緯については明らかにされていない。また、近隣都市や競技団体関係者が競技場の存置を要望していたことが明らかになっているが、それに対する大会組織委員会の対応については明らかにされていない。

そこで本研究では、行政文書や大会組織委員会議事録の検討を行い、恵庭岳滑降競技場跡地の処理方策決定以降の競技場竣工に至る経緯や、競技場の存置要望に対する札幌大会組織委員会の対応について明らかにする。また、本研究結果に基づき、オリンピック・ムーブメントにおける環境保護や持続可能性のあり方について若干の考察を行う。

検討の結果、主に以下の4点が明らかになった。1)工事施行によって削られた箇所は速やかに緑化するととも

に、競技施設を札幌大会開催年内に撤去することが条件付けられていた。2) プレ大会として実施された「札幌国際冬季スポーツ大会」の運営実績や国際スキー連盟の指摘を踏まえ、札幌大会における競技会を安全に実施することを目的として土地形状を変更するための工事が行われていた。3) 近隣都市や競技団体関係者から恵庭岳滑降競技場の存置を求める意見が挙げたが、大会組織委員会は復原を条件として建設許可がなされていることや、国際社会から環境問題を無視あるいは軽視していると批判を受ける可能性があると考え、存置案を退けた。4) 大会終了後、恵庭岳滑降競技場跡地の一部が「支笏湖自然の村」として後利用されていた。

11:32 AM - 11:47 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第10会場)

[スポーツ文化-A-03] コロナ禍における「ホストタウン事業」を通じた学生の国際理解に関する研究（人）

つくば市・筑波大学におけるスイスチームのアテンド経験に着目して

*Ryu Sakamoto¹ (1. University of Tsukuba)

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京2020大会）では、国連加盟国を超える206ヶ国が参加をした。東京2020大会は、国境を越えて一つの場所に集まり国際交流のできる絶好の機会であったともいえる。東京2020大会では取り組みの一つとして、グローバル化の推進、地域の活性化等を目的とし、東京2020大会参加国・地域との人的・経済的・文化的な相互交流を図った「ホストタウン事業」が各地方自治体で行われた。しかしながら、コロナウイルスの蔓延により、地域間での交流などといった当初予定していた活動ができないホストタウンやホストタウン事業自体を中止する地方自治体が多くあった。スイス選手団の受け入れを行った茨城県つくば市でも、当初予定していた事前キャンプ合宿で来日する選手の練習見学会や来日する選手のためのウェルカムイベントの開催が中止になり、選手と市民との交流は難しい状況になった。一方、限られた人数ではあるが、自発的に応募し、アテンドスタッフとして選手補助などの業務をした学生がいたことも事実である。一般に「ホストタウン事業」の目的の達成は難しかったといわれるが、彼ら、彼女らの経験の中には、当初の目的に関わる重要な経験が含まれていたのではないかと。本研究では、以上の問題意識に基づき、つくば市のホストタウン事業に関わった学生のアテンド経験に着目し、文献およびインタビュー調査を通して、これら内容を明らかにした。文献研究より、ホストタウン事業の発足経緯と目的、つくば市での受け入れ経緯から活動内容、コロナウイルス対策まで明らかになった。また、インタビュー調査により、ホストタウン事業での活動を通じて、参加した学生達は国際意識に変容があり、オリンピックバリューの理解が促進されていた。これは、コロナ禍で開催された東京2020大会の成果の一端を明示することにつながるものと期待される。

Oral (Theme) | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】 大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表②

Chair: Koji Takahashi (Nagasaki University)

Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 12:19 PM 第5会場 (2号館4階4E教室)

[学校保健体育-A-06] 生涯スポーツ推進のための経済学的視点を取り入れた教育の可能性について (教,経,心)

*Nobuko Sano¹, Hiraku Shiho² (1. RIKKYO UNIVERSITY, 2. Tokyo Woman's Christian University)

11:00 AM - 11:15 AM

[学校保健体育-A-07] 大学体育におけるこころの準備運動としての「笑いワーク」の教育効果 (教,方)

*Eri Fujita^{1,2}, Shiho Hiraku¹, Yukio Tanaka^{1,2} (1. Tokyo Woman's Christian University, 2. Tokyo University of Agriculture and Technology)

11:16 AM - 11:31 AM

[学校保健体育-A-08] The whereabouts of principles of physical education in Japan

*Shohei Takao¹ (1. Nippon Sport Science University)

11:32 AM - 11:47 AM

[学校保健体育-A-09] 新型コロナウイルス感染症対策のためにオンデマンド型遠隔授業を活用した体育実技系必修科目の検討 (介,生)

*Tomoaki Bunya¹, Tomomi Monri¹, Takeshi Miyakawa¹ (1. Kawasaki University of Medical Welfare)

11:48 AM - 12:03 PM

[学校保健体育-A-10] 大学における教員養成課程での身体運動文化としてのダンス教育の重要性 (介,ア,教,バ)

*Masae Yamazaki¹ (1. kanazawa university)

12:04 PM - 12:19 PM

11:00 AM - 11:15 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 12:19 PM 第5会場)

[学校保健体育-A-06] 生涯スポーツ推進のための経済学的視点を取り入れた教育の可能性について（教,経,心）

ジェンダー・スタディーズに立脚して

*Nobuko Sano¹, Hiraku Shiho² (1. RIKKYO UNIVERSITY, 2. Tokyo Woman's Christian University)

目的

2022年3月25日に第3期スポーツ基本計画が策定された。そこでは「女性」というジェンダーに属する人々のスポーツ推進については詳細な記載が見られるが、「男性」については「女性」同様の指針等がみられない。この状況からも分かる通り、未だ、スポーツ実施については、「女性」、「男性」というジェンダーに違いがみられ、「男性」のスポーツ実施には「男性」特有の問題があり、「女性」には更なるスポーツ推進施策が国を挙げて期待されている。これまで様々な方法でジェンダーの視点に立ったスポーツ推進施策が図られてきたが、管見では明らかな結果をもたらす方法は見当たらない。そこで本研究では、大学体育教育に経済学の視点を盛り込むことで、スポーツ推進の向上が可能かどうかの検討に資する知見を得ることを目的に、スポーツに関する意識調査を実施した。

方法

2022年4月に関東圏の共学の4年制大学の学生を対象に Web調査を実施した。対象者は264人（「女子」154人、「男子」106人、「その他」4人）であった。学年は1年生が150人と最も多く、かつ、スポーツ学を専攻する者の割合が多かった。

結果及び考察

90%以上の人がスポーツをすることは自分の人生にとって重要だと考え、約80%の人がこれまでスポーツを十分に経験してきたと考えていた。約75%の人が生涯にわたってスポーツをすることで将来の自分の医療費は大幅に削減される、約80%の人が将来の介護費が大幅に削減されると考えていた。一方で約40%の人がスポーツするためにお金をかけることに抵抗があると答えた。これまでの体育の時間に「女子」というジェンダーに属する人はスポーツを熱心に実施してきたと思うかについては約40%の人が熱心と回答し、「男子」というジェンダーに属する人については約75%の人が熱心であったと回答したが、回答者の性別によって回答傾向が異なることが示唆された。スポーツと「経済」との関わりに関する知見を開陳する。

11:16 AM - 11:31 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 12:19 PM 第5会場)

[学校保健体育-A-07] 大学体育におけるこころの準備運動としての「笑いワーク」の教育効果（教,方）

*Eri Fujita^{1,2}, Shiho Hiraku¹, Yukio Tanaka^{1,2} (1. Tokyo Woman's Christian University, 2. Tokyo University of Agriculture and Technology)

【緒言】健康長寿社会実現のためスポーツ実施率の向上が課題となっており、大学体育教育の果たす役割は大きい。笑いは緊張緩和や幸福感、活力、友好的な感情などのポジティブな感情を喚起するため、笑いによる心の準備運動は大学体育授業の教育効果の向上や体育授業におけるコミュニケーションをスムーズに高める効果があると推測され、多くの大学が大学体育の教育目標に掲げるコミュニケーション能力向上等の教育効果向上に役立つと思われる。【目的】本研究では、大学体育におけるこころの準備運動としての「笑いワーク」が大学体育授業の教育効果に与える影響について検証する。【方法】2021年10月～12月に大学体育実技授業内で介入調査を行った。授業開始時に通常の準備運動に加えて笑いワークを実施する授業（介入群）と通常の準備運動のみを行う授業（対照群）を設定した。両群ともに同一の内容からなる体育実技授業を実施し、笑いの準備運動が与える影響について、気分・感情評価(POMS2短縮版)、コミュニケーション・スキル尺度(ENDCOREs)、初年次体育授

業の主観的恩恵評価尺度を用いて検討を行った。【結果】その結果、笑いワーク実施群の体育実技後のPOMS2の気分プロフィール変化は、笑いなしの対照群に比べてより大きな改善効果がみられた。ENDCOREs結果から、笑いワーク実施群では「表現力」「自己主張」「関係調整」に良好な変化がみられた。初年次体育授業の主観的恩恵評価尺度では、笑いワーク実施群では笑いなしの対照群に比べて「チームや班のみんなで協力しあうことの大切さの理解」や「技術の上手い下手に関わらず、いろんな人と互いに関われた」という項目において有意に得点が高く、コミュニケーション能力の向上がみられた。【考察】「笑いワーク」をこころの準備運動として活用することにより、大学体育授業の教育効果やコミュニケーション能力向上のアプローチとして期待できる。

11:32 AM - 11:47 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 12:19 PM 第5会場)

[学校保健体育-A-08] The whereabouts of principles of physical education in Japan

Consideration on the process of transition from “principles” to “philosophy”

*Shohei Takao¹ (1. Nippon Sport Science University)

日本体育・スポーツ・健康学会は、学際的な研究を推進し、実践的・応用的な学術知を社会へ発信すべく、2020年に応用（領域横断）研究部会を設立した（菊，2022）。学際的・実践的な知の産出を期した制度設計の変革は、体育学会が発足した1949年以降、はじめてのことであるといえるだろう。

とはいえ、わが国の体育学には、学際的・実践的な知を志向する研究領域が存在していなかったわけではない。体育学には、「体育原理」と呼ばれる研究領域があった。「体育原理」は、米国の“principles of physical education”（以下、PPE）をモデルとしてわが国に受容された。PPEは、人文・社会科学から自然科学へいたる知見を集約し、体育実践に寄与しうる原理原則を体系化しようとする研究領域である（深澤，2016）。1962年には、体育学会に「体育原理専門分科会」が設けられ、「体育原理」の研究組織は学会制度のなかに拠点を獲得することとなった。

だが、わが国の「体育原理」は、PPEをモデルとしたものであったにもかかわらず、その実質は、およそ体育の哲学的研究を志向するものであったといわれている（佐藤，2006）。結果的に、2005年には、「体育原理専門分科会」は、「体育哲学専門分科会」へ名称変更がなされている。

もっとも、わが国の「体育原理」の歴史を紐解いてみると、少ないながらもPPEを志向した痕跡を確認することができる（前川，1981；川村，1985）。また、「体育原理」を人文・社会科学的な領域に収斂することに対しては、一定の疑義が投げかけられてもいた（飯塚，1965）。学際的で実践的な知への志向は、「体育原理」の名のもとで萌芽しつつあったと考えられる。

そうであるならば、学際性と実践性を志向した「体育原理」は、どこへいったのだろうか。この点を究明すべく、本研究では、日本体育学会の設立から2005年の名称変更までの期間において、「体育原理」がいかなる概念として理解されてきたのかを考証し、わが国の体育原理研究の展開について考察する。

11:48 AM - 12:03 PM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 12:19 PM 第5会場)

[学校保健体育-A-09] 新型コロナウイルス感染症対策のためにオンデマンド型遠隔授業を活用した体育実技系必修科目の検討 (介,生)

大学1年生対象の2020年度秋学期授業の調査結果から

*Tomoaki Bunya¹, Tomomi Monri¹, Takeshi Miyakawa¹ (1. Kawasaki University of Medical Welfare)

【背景】2020年度は新型コロナウイルス感染症対策として、対面授業から遠隔授業（大学の方針によりオンデマンド型を採用）に切り替えることを余儀なくされた。コロナ禍においては外出や行動の制限により、体力低下や体調の変化が憂慮され、また授業に対する満足度の低下も懸念された。【授業内容】ストレッチングやレジスタンス運動、有酸素性運動など多岐にわたる種目や強度で、一人でも楽しく行える動画や静止画（計32点）を配信した。これらを視聴し実践した感想等をLMSに送信すること、そして自宅等で実践した運動内容と振り返りを記録することを課題とした。オンデマンド型ながらも双方向を意識し、様々な感想、Q&A、運動時の工夫や他の学生に勧めたいことをLMSに掲載し、教員－学生間、学生同士の情報共有に努めた。【方法】対象は451名（男性99名、女性352名）である。調査は全授業終了後に対面で実施した。【結果・考察】体調の変化として肩こり、腰痛、目の疲れ、憂鬱感は軽減傾向にあったが、寝付きや寝起きは増悪傾向にあった。体型は「引き締まった」が「緩んだ」の1.6倍であった。柔軟性、筋力、全身持久力は「変わらない」か「向上した」が多く、「向上した」は「低下した」の9.0、3.6、1.4倍であった。授業満足度（満足・やや満足・やや不満・不満）の満足群は88%（男性80%、女性90%）であり、女性がより高値を示した。対面授業ができない前提での回答ではあるが、双方向としての工夫を2/3以上の学生が高評価だったことが関係していると推察する。また、好評価の配信内容は愁訴や姿勢の改善を主としており、日頃の悩みに即した運動であったことも一因と思われる。さらに「体育は苦手だが楽しかった」「対面の方が楽しいが役に立った」などの自由記述がみられ、大学体育の意義として、社会人になってからも活用できる運動の情報提供が重要であると考えられる。

12:04 PM - 12:19 PM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 12:19 PM 第5会場)

[学校保健体育-A-10] 大学における教員養成課程での身体運動文化としてのダンス教育の重要性（介,ア,教,バ）

*Masae Yamazaki¹ (1. kanazawa university)

1

Oral (Theme) | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

Chair: Wakaki Uchida (Kyushu University)

Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第1会場 (3号館3階301教室)

[競技スポーツ-A-01] もしアスリートがパーソナルコーチングを受けたら（教,方）

*Kenryu Aoyagi¹ (1. Kanto Gakuin University, College of Economics)

11:00 AM - 11:15 AM

[競技スポーツ-A-02] 大学における学習支援は競技スポーツを教育に結びつけられるのか（哲）

*Takaharu Kishii¹ (1. Univ. of Tsukuba)

11:16 AM - 11:31 AM

[競技スポーツ-A-03] A case study of issue on junior athlete development system in speed skating

*Shunichi Onodera¹, Toshinobu Kawai² (1. Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba, 2. Faculty of Health and Sport Science, University of Tsukuba)

11:32 AM - 11:47 AM

11:00 AM - 11:15 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第1会場)

[競技スポーツ-A-01] もしアスリートがパーソナルコーチングを受けたら (教,方)

大学生アーチェリー選手を対象とした実践事例報告

*Kenryu Aoyagi¹ (1. Kanto Gakuin University, College of Economics)

パーソナルコーチングとは、受け手の目標達成に向けて、対等な関係性で傾聴や質問などを用いた対話を行い、気づきや学び、自発的な行動を引き出すような関わり方である。パーソナルコーチングの場合、コーチはそのスポーツやスポーツ科学に関する知識および経験を有する必要はなく、一般に専門的な技術・戦術の指導やスポーツ科学的な内容の教授が多いスポーツコーチングとは異質なものであると言える。

パーソナルコーチングは経営者や管理職、または従業員などを対象にビジネス領域で用いられることが多いが、一部ではアスリートへの実践も行われており、パフォーマンス向上やメンタル面などへの好影響が期待されている。しかし、アスリートを対象としたパーソナルコーチングに関する研究は希少である。そこで本研究では、アスリートを対象としたパーソナルコーチングを企画実践し、どのような作用があるのかを探索することを目的とした。大学のアーチェリー部に所属する学生2名（男性1名、女性1名）を対象に、約半年間、10回程度のパーソナルコーチングセッションを行い、終了後に半構造化インタビューを実施した。コーチングを担当したコーチ2名は国際コーチング連盟に認定されたプログラム（ACTP）を受講し、試験を経て取得する資格であるCPCC（Certified Professional Co-Active Coach）を保有していた。いずれもアーチェリーの競技経験はないため、技術や知識、戦術の指導はできないコーチであった。コーチに対しても、介入終了後に半構造化インタビューを実施した。

インタビューからは、パフォーマンス（得点や安定感）やモチベーションの向上、競技への向き合い方の変化、自己理解や自己一致の進展など、様々な作用の可能性が示唆された。また、チームのマネジメントやチームパフォーマンスへの好影響、競技以外の生活への波及効果についても認識されていた。介入内容およびインタビューの詳細は学会会場にて報告する。

11:16 AM - 11:31 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第1会場)

[競技スポーツ-A-02] 大学における学習支援は競技スポーツを教育に結びつけられるのか（哲）

*Takaharu Kishii¹ (1. Univ. of Tsukuba)

本発表は、学習支援を切り口に「大学スポーツ」の教育理念を問うものである。

学生のスポーツは今まで体育会や学生競技連盟などの学生自治により営まれ、大学はほとんど関与してこなかった。そのような大学にとって不透明な運営から生じる諸課題の解決を目的の一つとしながら2019年3月に一般社団法人大学スポーツ協会（UNIVAS）が設立された。

UNIVASが振興の対象とする「大学スポーツ」は、「教育、研究又は社会貢献の一環として行われる学生の競技スポーツ」（定款第3条）として定義されている。これまでは単に学生の行う競技スポーツであったものを「大学スポーツ」と呼び直しているのであるが、その経緯は定かにされていない。ここから、教育の一環としての競技スポーツとはどのようなものであるのか、言い換えれば、「大学スポーツ」の教育理念はどのようなものであるか、という問いが生じる。

教育のための事業としてよく例示される方策が、競技スポーツ活動への参加に際した成績基準の設定と競技スポーツに取り組む学生に対する学習支援である。その背景としてよく想定されるのは、授業を疎かにする学生の姿、あるいはそれを黙認する大学の姿勢である。なかでも、それを課題と捉え唱えられる学習支援は、大学で為される教育（授業）に向かうこと、すなわち学習すること、を助けるという点でたしかに教育的な取り組みのよ

うに見える。

しかし、これには問題点もある。すなわち、ここでは競技スポーツが教育を妨げる要素になっていないと言うだけで教育的な取り組みであるとまでは言えていないということである。ただし、仮に支援に積極的な教育としての要素が見つけられるのであればこの問題も解消されよう。つまり、この支援が大学教育においてどう捉えられているかを探ることは、学習支援に教育としての根拠のひとつを置く「大学スポーツ」の掲げる教育理念を問う方法として有効であろう。

11:32 AM - 11:47 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第1会場)

[競技スポーツ-A-03] A case study of issue on junior athlete development system in speed skating

*Shunichi Onodera¹, Toshinobu Kawai² (1. Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba, 2. Faculty of Health and Sport Science, University of Tsukuba)

わが国のスピードスケート競技は、一貫指導システムのモデルづくり(日本オリンピック委員会, 1999)の調査対象となり、2018年の平昌オリンピックの成功(紅梅, 2020)、2022年の北京オリンピックの活躍につながった。しかし、育成年代の競技人口は減少の一途をたどり、インターハイの優勝タイムも過去20年停滞している。今後も継続的に高い国際競技力を保つためには、競技参画人口を拡大しつつ、競技特性を考慮した長期の競技者発掘・育成、強化のシステムとその具体的なプログラムを作成し、地方競技団体と連携しながら実行できる体制づくりが求められる。本研究は、スピードスケート競技におけるジュニア年代の指導及び育成組織に関わった当事者へのインタビューから、育成システム構築の阻害要因を考察することで、育成システム構築や改善につながる知見を得ることを目的とする。

Oral (Theme) | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

Chair: Riki Sukou (Japan Women's College of Physical Education)

Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第2会場 (3号館4階401教室)

[競技スポーツ-A-04] 絶対的状況下におけるアスリート支援のための アスリート・ターミナルケアとスポーツチャプレンの機能 (心)

*maeda shogo¹ (1. Toyo Univ.)

11:00 AM - 11:15 AM

[競技スポーツ-A-05] トップスポーツにおけるスポーツファーマシストのあり方 (社)

*Sachiko Otsuka¹, Jun Seino^{2,3}, Yuki Oshiba⁴, Mitsugi Ogata² (1. NTT Medical Center Tokyo, 2. Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba, 3. R&D Center for Smart Wellness City Policies, University of Tsukuba, 4. Yamanashi Gakuin University Faculty of Health and Nutrition)

11:16 AM - 11:31 AM

[競技スポーツ-A-06] 幼少期における競技経験が大学野球選手の競技レベルに及ぼす影響 (方, 発)

*Ryuto Fuke¹, Yoshimitsu Kohmura², Kazuhiro Aoki¹ (1. Juntendo University Graduate School, 2. Juntendo University)

11:32 AM - 11:47 AM

11:00 AM - 11:15 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第2会場)

[競技スポーツ-A-04] 絶対的状況下におけるアスリート支援のための アスリート・ターミナルケアとスポーツチャプレンの機能(心)

アスリートとしての「死」と人間としての「再生」

*maeda shogo¹ (1. Toyo Univ.)

新型コロナウイルス感染症世界的蔓延の影響により、東京五輪2020は、五輪史上初1年延期という事態に見舞われた。開催が近づいているにもかかわらず開催可否は不透明であり、更には中止や再延期という国民からの意見が約6割以上を占めるといった状況であった。2021年7月23日に賛否両論の中、開会式が開催されたが、中止を求める声が減少することはなかった。政治的・経済的な理由による強引な五輪議論は、本来の主役であるアスリート達を置き去りにしている。特に、開催の可否、世論や社会の変化にトップアスリート達は翻弄され続けた。努力を続けてきたアスリート達は何も悪くないにもかかわらず、五輪に関わることで自体が悪である、といった世論さえ生まれ、東京五輪代表候補選手は未だかつて無い心理状態に追い込まれた。東京五輪の開催可否に関する報道に翻弄される代表候補者選手達のゆれうごく精神状態の変容を開催直前までの約1年間、詳細なヒアリング調査を行い、明らかにした。多くのトップアスリートが五輪の開催有無、通常開催の有無に対して不安をもっており、また、その不安への克服も「開催されると信じる」といった、いわば「思考停止」にする事による克服である事が推察された。また、「不安はない」と回答した選手もいたが、その根拠や理由は極めて曖昧であり、「不安はあるが克服している」と回答した選手達と同様、「思考停止」的な状態である事が推察された。つまり、今回の調査結果からトップアスリート達が「自分の努力では解決できない困難」に直面した時に発生する不安や絶望は、根本的には解決はしない、という傾向が強い事が明らかとなった。そこから、トップアスリート達が「自分達の努力ではどうしようもない」という状況に直面した場合、指導者はどのようなケアが可能であるのか、といった点に着目し、トップアスリートを支える仕組みづくりについて検討する。

11:16 AM - 11:31 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第2会場)

[競技スポーツ-A-05] トップスポーツにおけるスポーツファーマシストのあり方(社)

*Sachiko Otsuka¹, Jun Seino^{2,3}, Yuki Oshiba⁴, Mitsugi Ogata² (1. NTT Medical Center Tokyo, 2. Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba, 3. R&D Center for Smart Wellness City Policies, University of Tsukuba, 4. Yamanashi Gakuin University Faculty of Health and Nutrition)

第3期スポーツ基本計画では、スポーツ・インテグリティの確保と推進が掲げられている。その中では、教育研修や研究活動等を通じたドーピング防止活動の展開が求められている。しかし、その推進を担う一人と考えられるスポーツファーマシスト(以下、SPと略す)が果たす役割や活動目標について、研究として明らかにした調査はない。そこで、アスリートやアンチ・ドーピング(以下、ADと略す)に関わる多様な対象者の観点から、SPのあり方を明らかにすることを目的とした。調査対象者は、「トップスポーツに関わる者」で、「SPとしてAD活動に従事する者」(中央競技団体で活動するSP2名)、「SPとAD活動を熟知し、その推進を図る者」(公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構専務理事1名)、そして「SPからADに関するサポートを受けたことがある者」(中央競技団体強化責任者1名、オリンピックメダリスト2名)を設定した。調査は、半構造化インタビューを行い、リサーチクエスションとして「トップスポーツにおいてSPが求められることとは」を設定した。分析は、修正版グラウンデッド・セオリーアプローチにて行った。本研究の結果から、SPは、トップアスリートを薬やサプリメント使用時の不安から守り、安心して競技に取り組めることを支えることが求められると

示唆された。また、スポーツに関わる他の医療従事者と連携し、トップアスリートの健康を支える役割を担う存在となることも示唆された。さらに、その実現に向けて、自身の専門的な資質能力の向上のために、スポーツを基盤とした学習を継続し、それによって推進される SPの活動が、社会に広く認知される必要性が示された。SPは、スポーツに資する薬の専門家として、スポーツ・インテグリティの確保に向けて、教育的役割を担う可能性も示唆された。

11:32 AM - 11:47 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 11:47 AM 第2会場)

[競技スポーツ-A-06] 幼少期における競技経験が大学野球選手の競技レベルに及ぼす影響 (方, 発)

*Ryuto Fuke¹, Yoshimitsu Kohmura², Kazuhiro Aoki¹ (1. Juntendo University Graduate School, 2. Juntendo University)

【目的】本研究では、日本の大学野球選手を対象に、野球を始めた時期や専門化した年齢、他種目経験など競技経歴の現状を明らかにし、競技経歴と各年代における競技レベルとの関連性を分析した。更に、中学生の時期に使用していたボールと各年代の競技レベルにも関連性があるのかを調査した。【方法】全日本大学野球連盟に加盟しているチームに所属する選手589名を対象にインターネットによるアンケート調査を実施した。質問項目は、野球を始めた年齢、野球以外の競技経歴、各年代における野球の最高成績、使用球、怪我(障害)、競技レベル(ベンチ入りメンバー、ベンチ外メンバー)などとした。競技経歴と各年代の競技レベルとの関連性、及び中学生の時期に使用していたボールと各年代の競技レベルとの関連性について χ^2 検定を行った。【結果及び考察】調査の結果、野球を始めた平均年齢は 7.8 ± 1.8 歳であり、野球に専門化した平均年齢は 10.0 ± 3.2 歳であった。他種目経験者は328人であり全体の58%であった。そのうち233人(71%)の選手は野球に加えて他に1種目の競技経験があり、2種目以上の競技種目を経験していた選手は95人(29%)であった。競技経歴と各年代の競技レベルでは高校、大学で有意な関連が見られ、3歳から9歳の間で専門化し、野球以外の競技経験が無い選手で高校における競技レベルが高い傾向があった。また、3歳から9歳の間で専門化し、野球以外の競技経験が有る選手で大学における競技レベルが高い傾向があった。さらに、中学生の期間で使用していたボールと各年代の競技レベルでは、高校において有意な関連が見られたが、大学における競技レベルでは有意な関連がなかった。以上の結果から、専門化する時期が早い方が競技レベルは高い傾向にあるが、幼少期に複数の競技を経験することは大学での競技力向上に影響を及ぼす可能性が示唆された。

Oral (Theme) | 学校保健体育研究部会 | 【課題 A】 大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会 【課題 A】 口頭発表①

Chair: Kaori Kimura (Tokai Gakuen University)

Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 12:19 PM 第3会場 (3号館4階402教室)

[学校保健体育-A-01] 医療系大学生における健康に関連する心と身体のフィットネス (保,発,生)

*Tetsuya Mizuno¹, Yosuke Mizuno², Tatsuo Yagi³, Hideki Takaoka⁴, Miki Kurihara⁵, Takuma Wada⁶, Seiji Yoshitake⁷ (1. Tokyo Medical and Dental University, 2. Doctoral Program in Sociology Graduate School of Human Sciences, Sophia Univ., 3. Tokai University, 4. Keiai University, 5. Sophia University, 6. Izumo Hokuryo Junior & High School, 7. Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Tsukuba Univ.)

11:00 AM - 11:15 AM

[学校保健体育-A-02] コロナ禍における学生の健康及び生活に関する調査からみるアフターコロナへの試み (スポーツ栄養)

*Hatsuho Zeniya¹, Saiko Shirakawa² (1. International Budo University, 2. Showa Women's University)

11:16 AM - 11:31 AM

[学校保健体育-A-03] 大学生の対処資源測定尺度の作成 (心)

*Shunsuke Sakata¹, Namika Motoshima², Takumi Nakasuga³, Kojiro Matsuda⁴, Takashi Naito⁵, Yoshio Sugiyama⁶ (1. Yokohama college of commerce, 2. Kyushu Sangyo Univ., 3. Hyogo Univ. of Teacher Education, 4. Kumamoto Gakuen Univ., 5. Hokkai-Gakuen Univ., 6. Kyushu Univ.)

11:32 AM - 11:47 AM

[学校保健体育-A-04] 大学体育授業の主観的恩恵に及ぼす学修者個人要因および学修状況要因の検討 (心)

*Junichi Nishida¹ (1. Kindai Univ.)

11:48 AM - 12:03 PM

[学校保健体育-A-05] 大学体育授業での心拍計を用いた積極性の評価は授業中の心拍数および授業後の快感情を増加させる (バ,生)

*Yoichi Ohta¹, Kyohei Takahashi² (1. Shizuoka University of Welfare, 2. Kumamoto Gakuen University)

12:04 PM - 12:19 PM

11:00 AM - 11:15 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 12:19 PM 第3会場)

[学校保健体育-A-01] 医療系大学生における健康に関連する心と身体の フィットネス（保,発,生）

ここ10年間の推移を中心に

*Tetsuya Mizuno¹, Yosuke Mizuno², Tatsuo Yagi³, Hideki Takaoka⁴, Miki Kurihara⁵, Takuma Wada⁶, Seiji Yoshitake⁷ (1. Tokyo Medical and Dental University, 2. Doctoral Program in Sociology Graduate School of Human Sciences, Sophia Univ., 3. Tokai University, 4. Keiai University, 5. Sophia University, 6. Izumo Hokuryo Junior & High School, 7. Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Tsukuba Univ.)

【緒言】健康が心身の両側面から理解されるように、体力（フィットネス）にも身体的要素と精神的要素があり（猪飼：1969）、この考え方は我が国の保健体育領域でも広く用いられている。本研究では医療系大学生を対象に健康に関連する心身のフィットネスの現状を検討する。

【方法】2010年度～2020年度に首都圏にあるA医療系大学に在籍した1年生男女学生3115名（平均年齢 18.56 ± 1.61 歳）を対象に、健康に関連する身体的フィットネス（身長、体重、握力、上体起こし、長座体前屈、20mシャトルランテスト）と精神的フィットネス（HRMF-62；自律性、肯定的な向き合い方、柔軟性、心の状態（水野ほか：2022）の測定を実施した（2020年度のみ身体的フィットネスの測定は実施していない）。測定・調査は、各年度当初の4～5月及び翌年1月に行われた。

【結果】身体的フィットネス：年度当初の男子学生の握力と20mシャトルランテストはここ10年で低下する傾向にあり、2019年度の測定値は2010年度の測定値より有意に低かった（ $p<.001$ ）。また、女子学生の20mシャトルランテストにおいても同様に、その値は2016年以降で徐々に低下する傾向にあり、2019年度の測定値は2010年度の測定値より有意に低かった（ $p<.001$ ）。女子学生の20mシャトルランテストにおいても、2016年以降で徐々に低下する傾向にあり、2019年度の測定値は2010年度の測定値より有意に低かった（ $p<.001$ ）。精神的フィットネス：4尺度得点とも推移は男女で異なっており、一定の傾向は見られなかった。また、心の柔軟性尺度において、男女とも2020年度にのみ有意な低下が認められた（ $p<.05$ ）。総合：種目また性別により相違はあるが、心身のフィットネスにおける多くの項目において、初年次教育の期間に向上が見られた。

【考察】近年における身体的フィットネスの低下は全国的な傾向と一致していた。また、2020年度にのみ認められた心の柔軟性低下はCOVID-19感染拡大禍における様々な生活行動上の制限によるものと考えられた。

11:16 AM - 11:31 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 12:19 PM 第3会場)

[学校保健体育-A-02] コロナ禍における学生の健康及び生活に関する調査から みるアフターコロナへの試み（スポーツ栄養）

*Hatsuho Zeniya¹, Saiko Shirakawa² (1. International Budo University, 2. Showa Women's University)

【背景】新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大による社会情勢の大きな変化の中、S女子大学では2020年度においては、オンラインによる授業が大半を占めることになった。実験・実習・演習・実技などの科目に関しては、2021年度前期（春期）においては、履修者の「密」を避けるために、隔週登校や授業時の人数制限さらには、授業内容の変更などにより、充実した授業を確保する工夫の下での実施となった。2021年度後期（秋期）においても、対面授業は可能な限り回復した。しかし、14週・15週の授業についてはオンライン授業として年度を終えることになった。【目的】コロナ禍での学生の健康や生活に関する状況について把握することは、アフターコロナに備えることとして、不可欠であると考えた。さらに、2022年度前期からは、感染対策をとったうえで、対面授業が再開された。コロナ禍での学生の状況を把握したうえで、対面授業となった学生の健全な学生生活の一助となることを目的とした。【方法】調査対象は、S女子大学で一部対面授業が再開した2021年後期10月上旬に登校し、対面授業を受講している学生で、調査に同意を得られた、1年次～4年次の女子学生133名で

あった。Googleフォームを用いたWEBアンケート調査を実施した。調査は、主旨を説明した後、回答を依頼した。調査項目は、健康・運動・大学生活に関する内容とした。なお、本調査は昭和女子大学連理委員会の承認を得て実施した。【結果と考察】対象学生は、基本は、「健康」であると考えているが、「運動不足」や「食事」についての不安や改善策を模索している状況であった。しかし、注視をすることは、学生が卒業まで、健康で充実した学生生活を送ることが大切であり、終わりの見えないコロナ禍で、教育の質の確保と身体的・精神的にも良好な状態をたもつための対策を考慮することが必要となる。

11:32 AM - 11:47 AM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 12:19 PM 第3会場)

[学校保健体育-A-03] 大学生の対処資源測定尺度の作成（心）

*Shunsuke Sakata¹, Namika Motoshima², Takumi Nakasuga³, Kojiro Matsuda⁴, Takashi Naito⁵, Yoshio Sugiyama⁶ (1. Yokohama college of commerce, 2. Kyushu Sangyo Univ., 3. Hyogo Univ. of Teacher Education, 4. Kumamoto Gakuen Univ., 5. Hokkai-Gakuen Univ., 6. Kyushu Univ.)

ストレス対処は多くの研究により効果が検証されるが、ストレス対処に必要とされる対処資源（Lazarus & Folkman, 1984）は特に国内において研究はわずかである（栗山・佐々木, 2021）。対処資源には、認知的要因、情動的要因、身体的要素が定義され（Hammer & Martin, 1985）、他者との交流や競技力向上の工夫が必要となる大学一般体育に影響を受ける可能性がある。上記より本研究では、大学一般体育による対処資源への効果を測定するための尺度作成を目的とした。尺度草案として、Hammer & Martin(1985)の定義を参考に、大学生が持ちかつ大学一般体育にて影響される可能性を考慮し、認知的要因として自尊感情（島本・石井, 2006等）、他者への肯定的態度（天貝, 1997等）、楽観性（外山, 2013）、情動的要因として感情調整能力（小塩, 2002）、社会的要因としてソーシャルキャピタル（芳賀ほか, 2017）、情報処理能力（島本・石井, 2006）、身体的要因として健康・体力（新規作成）に関連する42項目を収集した。また、基準関連妥当性を検討する項目として、渋谷・森（2002）及び尾関ほか（1991）を参考に、問題焦点型、情動焦点型、回避型を測定する10項目を引用した。尺度草案について大学生438名（18.8±1.08歳）を対象に質問紙調査を実施した。最尤法・バリマックス回転による因子分析を実施したところ、体力、自尊感情、情報活用能力、ソーシャルキャピタルの4因子が抽出され、内的一貫性、構造的妥当性が確認された（Cronbach's α = .84~.74, GFI = .93, AGFI = .91, CFI = .94, RMSEA = .05）。次に構成概念妥当性の確認として、ストレス対処との相関を確認したところ、問題焦点型にはすべての対処資源が有意な正の相関（ r = .49~.24）を持ち、情動焦点型には体力を除くすべての対処資源が有意な正の相関（ r = .22~.25）を持ち、回避型にはすべての対処資源が有意な相関を持たなかった。今後は、大学一般体育を受講する学生を対象に、本尺度により測定される対処資源を縦断的に検討することで、その効果を検討することが可能となる。

11:48 AM - 12:03 PM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 12:19 PM 第3会場)

[学校保健体育-A-04] 大学体育授業の主観的恩恵に及ぼす学修者個人要因および学修状況要因の検討（心）

学修成果の要因モデル構築に向けて

*Junichi Nishida¹ (1. Kindai Univ.)

高等教育機関における社会的成果の把握は世界的な潮流となり、わが国でも大学教育の学修成果の可視化が求められている。大学教育では個々の科目の総和がプログラム全体としての学修成果になると捉えられ、認証評価等による評価のみでは十分ではない。体育科目レベルでは、近年、学習者の自己報告に基づく評価ツール（初年次

体育授業の主観的恩恵評価尺度：PBS-FYPE）が作成され、平常時やコロナ禍における大学体育授業による学修成果の把握が進められている（西田他、2016、2022）。同時に、いくつかの体育授業の学修成果要因が見出されているものの、断片的要因にフォーカスしているため学修成果を高める知見は揃っていない。本研究では、大学体育授業の学修成果へ影響する要因を明らかにすることを目的とした。「大学体育授業研究プロジェクト（UPE Project）」にて、2017年に複数回調査を実施し、収集されたデータより体育授業の受講者を分析対象者とした。調査内容は、学修者個人要因としてENDCOREs、社会性測定尺度、レジリエンス要因尺度、日本語版TIPI-J、また学修状況要因として学習動機尺度、大学生版運動不振尺度、大学生版体育授業における動機づけ雰囲気測定尺度、大学体育版教員リーダーシップ行動尺度、大学体育実技経験評価尺度、そしてPBS-FYPEであった。データ分析を行った結果、PBS-FYPE全体得点について、まず学修者個人要因では「意思表示」、「対人関係」、「統御力」が抽出された。次に、学修状況要因では「集団志向」、「充実志向」、そして、「熟達雰囲気」「挑戦達成」が抽出された。本研究にて学修者個人要因と学修状況要因から捉えることより、複数の要因が関連していることが明らかになった。今後は、各関連要因の主観的恩恵への影響性を詳細に検討し、より高い学修成果を得るための学修成果獲得モデルを構築していく必要がある。

12:04 PM - 12:19 PM (Wed. Aug 31, 2022 11:00 AM - 12:19 PM 第3会場)

[学校保健体育-A-05] 大学体育授業での心拍計を用いた積極性の評価は授業中の心拍数および授業後の快感情を増加させる (バ,生)

*Yoichi Ohta¹, Kyohei Takahashi² (1. Shizuoka University of Welfare, 2. Kumamoto Gakuen University)

大学体育実技授業では「積極性」を成績評価の一つとして用いていることが多い。しかし、「積極性」の評価は教員の主観に頼るところが大き。したがって、客観的な指標で積極性を評価することができれば、成績評価基準の明確化に繋がるだろう。運動強度や運動時間の増加は、最大心拍数や平均心拍数の増加に繋がるものと考えられることから、授業中の心拍数が「積極性」の客観的な評価指標となる可能性が考えられる。しかし、大学体育授業で心拍数を「積極性」の客観的指標とした場合に、学生に与える身体的および心理的影響は明らかにされているとは言えない。そこで、本研究では、大学体育授業での心拍計を用いた積極性の評価が、授業中の心拍数及び授業前後の感情変化に与える影響を検証した。本研究では、体育授業を受講した60名（男性38名、女性22名）を解析の対象とした。研究の対象となる授業は、心拍計を装着して2回実施した。1回目には、積極性は成績評価の一つであるというシラバスに記載されている説明を行い授業を実施した。2回目には、積極性を心拍数によって評価するという説明の後授業を実施した。それぞれの授業の前後に、改訂版ポジティブ感情尺度を用いて気分調査を行った。授業はバスケットボールを実施し、レクリエーションとドリブルリレーを行った後、5分間のゲームを2回実施した。心拍数の測定開始から終了まではおよそ50分程度であった。授業中の最高心拍数と平均心拍数および高強度心拍数の出現時間は、心拍数によって積極性を評価した2回目の授業で、1回目と比較して有意に増大した。また、両授業共に、授業後に快感情が有意に高まり、その増加量は2回目の授業のほうが有意に大きかった。これらの結果から、大学体育授業での心拍計を用いた積極性の評価は授業中の心拍数および授業後の快感情を増加させることが示された。